

今月のテーマ  
雨

田上市長の  
心と手  
～自らの思いを皆さんに語るコラム～

先日、中東の国カタールの  
かたと話をする機会がありま  
した。その日は雨だったので、  
自然に気候の話になり、カタ  
ールの雨について質問すると、年  
に1回か2回、それも少し空  
気を湿らせる程度に降るだけ  
ということでした。「それでは  
雨も貴重な日本体験ですね」  
と言って笑い合いました。

6月から7月にかけて長崎  
は梅雨を迎えます。日本人は  
雨という自然とともに暮らし  
てきました。これからもそれは  
変わりません。

雨といえば、忘れられない思  
い出がいくつかあります。

一つは学生時代のことです。  
福岡から鳥取まで自転車旅行  
をして、今日は最終日という  
日に強い雨が降りました。ペダ  
ルを漕いでいると、雨粒が顔に  
痛いほど強く当たります。視  
界が悪く路面も滑りやすくな  
るので、自然に自転車のスピー  
ドは落ち、夕方には福岡に到  
着する予定だったのに、夜にな  
りました。暗くなり、一段とス  
ピードが落ちる中、夜中にな  
んとか無事に下宿にたどり着  
きました。

この体験をした後、自分の

中で変化したことがありま  
す。雨が降る日に室内にいる  
と、深い安心感を覚えるよう  
になったことです。濡れる窓に  
目をやりながら、雨の日に濡  
れずにいられることに不思議  
な幸福感のようなものを感じ  
るようになりました。今は随  
分薄らぎましたが、その時の  
感覚は今もよく覚えていま  
す。

もう一つは昭和57年7月23日  
のことです。大水害が起きたこ  
の日、私は市役所広報課の新  
米職員として、飯香浦と太田  
尾地区に残る「飾りそつめん」  
という行事の取材に出かけて

いました。雨が降り出し、ふだ  
んとは違う雨脚の強さに驚き  
ながらも取材を進めていまし  
たが、やがて湿度でテレビカメ  
ラが動かなくなり、仲間のス  
タッフがカメラを取替えに二  
旦職場に戻ることになりまし  
た。その間、飯香浦の地藏堂の  
中で待ちましたが、なかなか  
帰ってこないで、電話をかけ  
ると、市内中心部がひどいこ  
ろになって戻れないという報  
告でした。近所の家にお邪魔  
して電話を借りていたのです  
が、話している途中でその電話  
も切れてしまいました。結局そ

の夜は地藏堂の中で明かし、  
翌日、土砂で寸断された道を  
たどり、歩いて市役所に戻り  
ました。あの時の雨は、それま  
でもそれからも見たことのない  
ほど大粒でした。

大水害は299人の犠牲者  
を生みました。体験した人ひ  
とりにとって忘れられない記憶  
であると同時に、忘れてはなら  
ない長崎の記憶でもありま  
す。

今年も7月がやってきまし  
た。

大水害以降、治水ダムを増  
やしたり、河川や急傾斜地を  
改修するなど施設面の整備が  
随分進みました。でも施設だ  
けでは守れません。家族でいざ  
という時の行動  
を確認しておい  
たり、早めに避  
難したりするこ  
といった「ふだん  
の備え」がとて  
も大切です。

自分の命は自分で守る、地  
域の安全は地域で守る、とい  
う強い意識こそが命綱なので  
す。もう一度、いざという時の  
行動をしっかり確認し、大雨や  
台風に備えておいてください。



ながさき  
フチ  
旅行

出かけて  
見る・知る  
まちの  
オススメ  
スポット

周辺地図

船の出入りを見つめる波止

上面に平らな「はね出し」  
がのった石築地が見られる

漁港の全景 夕日もきれいだ

市街から車で約50分。出津教会堂を望む景色が広がる外海・出津地区。角力灘に注ぐ出津川流域には古くから、開墾で出る石で倉庫や塀などさまざまなのが築かれた。木材が不足していたことと併せて、この地の石が加工しやすかったことなどが理由だといわれている。

石積文化は河口の漁港にも色濃く残る。民家の石塀のほか、海の際まで歩くと防波堤としての石築地、海に突き出た波止も石積みだ。古くは江戸時代に築かれたこの地域特有のものばかりだ。漁港と人々の生活を静かに見守ってきた石積み。大切に伝えていきたい。

近くには外海地区の長い歴史、先人たちが暮らしぶりを伝える施設が点在する。これらと併せて立ち寄ってみては。

歴史を重ねる石積み  
出津漁港